「弁証法とは何か」における K. ポパーの弁証法批判

将 積 茂

The criticism on dialectic by K. Popper in his “What is dialectic?”

Shigeru Shōjaku

In his paper “What is dialectic?” K. Popper tried to point out many limitations in the modern dialectic, from the angle of method of trial and error. His criticism on dialectic is very radical and suggestive. This paper intends to make some of his arguments clear, and set forth dialectician's explanations of them.

はじめに

1967年6月の『思想』で上山春平氏は「弁証法の現代的課題」を論じられるに当って、カール・ポパーの弁証法にたいする痛烈な批判論文である “What is dialectic?” (1940年の *Mind* 誌に載せ、後に *Conjectures and Refutations* に収められる) に言及されて次のように書いておられる。「弁証法を支持する思想家は、この批判にたいしてどの程度有効な反論を投げ返すことができるか、自ら試みてみられるとよい。そしてそれができない場合には、『弁証法』ということばを使うのを止そう、というポパーの提言に従うことをおすすめしたい。……」

ヘーゲルの弁証法を研究し、弁証法の現代的形態を模索する筆者は昨年の科学哲学会の大会で筆者なりのポパー論文の検討をした研究発表を試みた。この論文はその原稿に若干の手を加えたものである。なおポパーはこの論文を書いた後 *The Open Society And Its Enemies* (1945年) などで同様の主張を繰り返しているが、彼の批判は本質的に変らないし、またこの論文ほど集約的には論じられていないので、ここではこの「弁証法とは何か」の敘述にそって彼の弁証法批判

の検討を試みることにする。なお紙数の都合で多面にわたる彼の議論のうちから三、四の論点にしぼって検討せざるをえないことをお断りしたい。このポパーの論文の要領のよい紹介が茅野良男氏の『弁証法入門』（1944年10月）によってなされている。

1. 弁証法批判のためのポパーの前提

——試行錯誤法——

ポパーは弁証法を批判するに先立って、自らの批判のより所となる視点を次のように前提している。

人類の思想の発展史においては、問題解決の一般的方法として試行錯誤法が行われてきたが、この *method of trial and error* は基本的には生物がその適応の過程で用いた方法である。この試行錯誤法がだんだんと意識的に発展させられていって、科学的方法 *scientific method* としての特徴をもつようになったのである。

ある問題が生じる→科学者たちは試みにある種の解決・理論を提出する→批判とテストが行われる→テストの結果として誤りであることが示された理論が除去される→他の理論が試みられる→→→

以上のような過程を進む試行錯誤法は、ポパーによれば、本質的に除去の方法 *method of elimination* である。そしてこの方法が成功するためには、(1)十分に多数な理論が提出されること、(2)提出された理論が十分に多様であること、(3)十分に厳格なテストが行われ、適切でない理論の除去が行われること、これら三つの条件が必要なのである。

ポパーはこのような方法論を前提にし、これと弁証法とを対比させることによって、「思想の発展が弁証法的に進む」と主張する弁証法論者 *dialecticians* の考え方、弁証法を批判しようとするのである。

2. 弁証法のポパーによる特徴づけとヘーゲル自身による特徴づけ

ポパーはヘーゲルが用いた意味での近代的弁証法を彼の批判の対象とするのであるが、それをいわゆる弁証法的トリアード、テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼでもって特徴づけようとする。彼は述べる。ある観念、理論、運動としてのテーゼ *thesis* はしばしば対立 *opposition* を生みだすだろう。なぜなら、この世界の大部分のものと同じく、そのテーゼはおそらく限られた価値をもつもの、弱点をもつものだからである。そして対立する観念、理論、運動としてのアンチテーゼ *antithesis* とテーゼとの抗争 *struggle* は新しい解決としての観念、つまり両テーゼの長所 *merits* を保存 *preserve* し、欠点 *limitations* を除去したジンテーゼ *synthesis* を生むのである。そしてこのジンテーゼはそれ自身一つのテーゼとして、さらにアンチテーゼを生みだす新しい弁証法的トリアード *dialectic triad* の最初のステップとなる。

ポパーはこのように弁証法的な思想の発展過程を描きだし、そしてこの過程をさきの試行錯誤法の過程と比較して、それにもとづいてヘーゲル的な弁証法を批判するのであるが、ポパーのこの特徴づけの当否の検討は後の節で彼の具体的な批判に即して行うことにしよう。ただここであらかじめ確認しておかねばならぬことは、ポパーが弁証法をいわゆる存在論としてではなく認識論として、つまり客観的な実在 *reality* そのものの発展ではなくいわば主観的な思惟 *reason* の発展に限定して特徴づけていることである。もちろんこの限定の根底には彼のヘーゲルの存在と思惟との同一 *identity* にたいする信念 *panlogism*⁽¹⁾ の否認があるのであるが、ただ弁証法論者の殆どが弁証法を単に主観的な観念の発展についての理論ではなく、客観的な世界の発展についての理論として解釈していることは少くとも事実として確認さるべきであろう。ヘーゲルの論理学は形而上学すなわち存在論と一致する。「なぜなら形而上学とは思想のうちに把握された事物の学であり、そこでは思想は事物の本質的規定を表現するものと考えられていたからである。」⁽²⁾ こうした弁証法は存在の理論であるという論点に関するかぎり、殆

どの弁証法的唯物論者の弁証法観⁽³⁾もヘーゲルに左袒しているといえよう。

以下、次節でのポパーの弁証法批判の議論が妥当であるかどうかの判断のより所として、当のヘーゲル自身が行っている弁証法の特徴づけを掲げることにする。

「論理的なものは形式上三つの側面を持っている。(i) 抽象的な側面ないし悟性的側面、(ii) 弁証法的側面ないし否定的理性の側面、(iii) 思弁的側面ないし肯定的理性の側面がそれである。」「(i) 悟性としての思惟は固定した規定性と、この規定性の他の規定性にたいする区別とに立ちどまっており、このような制限された抽象的なものがそれだけで成立し存在すると考えている。」「(ii) 弁証法的モメントは右に述べたような有限な諸規定の自己揚棄であり、反対の諸規定への移行である。」「(iii) 思弁的なものないし肯定的理性的なものは、対立した二つの規定の統一を、すなわち、対立した二つの規定の解消と移行とのうちに含まれている肯定的なものを把握する。」⁽⁴⁾

以上は、「真理が現存するほんとうの形態は真理の学的体系以外にない」⁽⁵⁾として、ある学問の対象をあらかじめ形式的に定義したり特徴づけたりすることを嫌ったヘーゲルが、弁証法について行った数少い形式的特徴づけである。

3. ポパーの弁証法批判

(i) 弁証法的発展の出発点は単一のテーゼである

弁証法は一つのテーゼから出発して、他の一つのテーゼと対立する……と理論の発展のコースを考えるが、そのようにただ一つのテーゼから発展がはじまると考えなくてもよいのであって、試行錯誤法は「そもそもの初めから、いくつかの相違したテーゼが相互に独立して提出され、しかも一つのテーゼが他の一つのテーゼに対立するとはかぎらぬ状況にも容易に適用されうる。」まずこのようにポパーは弁証法的発展の出発点となるテーゼの単一性というせまさを指摘する。

もし、このポパーの批判が正しいとするならば、弁証法と試行錯誤法との間には一般意味論 *general semantics* でいう二値的ないし二元的な考え方 *two-valued orientation* と多値的ないし多元的な考え方 *multi-valued orientation* との関係

が成立するだろうし、ケインズ流⁽⁶⁾にいうならば、弁証法は一般理論としての試行錯誤法の部分理論である、という関係が成立するでもあろう。

このポパーの批判にたいしては、弁証法論者として次のように答えるべきであろう。ヘーゲル自身はポパーの主張するように、弁証法的な論理の進行を、「ただ一つのテーゼから他の一つのアンチテーゼへ……」と考えはしなかった。ここでさきのヘーゲル自身の弁証法の特徴づけをふり返ってみよう。ヘーゲルがそこで主張していたことは、悟性的な思惟つまり是非弁証法的な思惟が独立して存在していると固定的に考えているものは反対物へと移行し、思弁的な思惟つまりは弁証法的な思惟が両者のうちにある肯定的つまり積極的な内容を把える、ということであった。ここには、「一つのテーゼは一つのアンチテーゼへ……」は明らかに主張されているけれども、弁証法論理が「つねにただ一つのテーゼから出発しなければならない」ということは主張されていない。そのことは、(四)の「弁証法的モメントは、右に述べたような有限な諸規定の自己揚棄であり、反対の諸規定への移行である」(傍点筆者)の傍点をうった「規定」が複数になっていることによっても明らかであろう。ヘーゲルは別の箇所でも次のように述べている。

「普通の意識は、区別されたものは相互に無関係であると考えている。例えば、われわれは、私は人間であり、私の周囲には空気、水、動物、および他者一般がある、という。ここではすべてのものが別々になっている。哲学（つまり弁証法的思惟）の目的は、これに反して、このような無関係を排して諸事物の必然性を認識することにある、他者をそれに固有の他者に対立するものとみることにある。」⁽⁷⁾ここでもヘーゲルは「一つのテーゼは一つのアンチテーゼへ……」としか主張していないと理解される。ヘーゲル哲学のこの趣旨ないし本質は、弁証法的唯物論の古典家たちによって、特にエンゲルスやレーニンによって、あるいは毛沢東によって、しばしば主張されている。例えば、毛沢東の『矛盾論』から関係する文章を拾うならば、「世界におけるあらゆる差異のなかにはすでに矛盾がふくまており……」,⁽⁸⁾「複雑な事物の発展過程には、いくたの矛盾が存在しており、そのなかには、かならず一つの主要な矛盾があり、それが存在し、発展することによって、その他の矛盾の存在と発展が規定され、あるいは影響をこうむる。」⁽⁹⁾

(傍点筆者)

以上のいくつかの文章にみられるように、弁証法論者は多くのテーゼの同時存在を認めており、ただそれらのテーゼに固有のアンチテーゼを発見することを弁証法の本質と考えているのである。したがってポパーの主張するように、弁証法はけっして「つねにただ一つのテーゼからのみ弁証法的発展は出発する」と主張していないのである。結局、ポパーのこの点についての批判は若干の弁証法の通俗的な解釈ないし誤解には妥当しても、弁証法の原理的欠陥を指摘するものとは考えられない。

もちろん、弁証法論者が現実の世界、歴史のなかに同時的に存在する多様性を見るのを忘れて、ただ一つのテーゼに一つのアンチテーゼが対立し、そこから一つのジンテーゼが生れることばかり機械的に主張するならば、当然このポパーの批判は正当なものとなってくる。そしてまた、しばしば弁証法論者にあっては、「諸現象をその相互の関連と被制約性との見地からみる」⁽¹⁰⁾ という原則的立場にもかかわらず、二元的対立を歴史的に把えるという思惟様式の優勢によって、複数の同時存在を十分に把えるという多元的な思惟様式が背景に退くことも少からず事実である。

最後に、ポパーのこの点の批判と類似した見解を既にフォイエルバッハがヘーゲルに投げつけていることを指摘しておこう。「彼（ヘーゲル）の直感および方法の形式そのものは、ただ排他的な時間でしかなく、同時にまた寛容的な空間でもあるというのではない。彼の体系はただ従属と継起を知るのみであって、並列と共存についてはなにも知らない。」⁽¹¹⁾ (傍点筆者)

(ii) 弁証法的対立はつねにジンテーゼを生むと考えられている

弁証法では、テーゼからアンチテーゼが生れ、テーゼとアンチテーゼとの抗争から、両者の欠点が否定され長所が保存されたジンテーゼがつねに生れる、と考えられている。ところが試行錯誤法では、観念ないし理論などとその批判つまりテーゼとアンチテーゼとの抗争からは、十分でなかったテーゼ（あるいはアンチテーゼ）の除去が生じる。そしてただ十分な数の理論が存在して、吟味されうる場合にのみ新しい理論の採用が行われるのであり、したがって論争が無 nothing

に終ることもしばしばありうると考えられる。

結局、試行錯誤法では、テーゼとアンチテーゼとの抗争から、(1)テーゼあるいはアンチテーゼの除去へ、(2)全く新しいテーゼの採用へ、(3)無へ、の三つのコースが考えられ、弁証法はその一つのコース(2)にすぎないと考えられる。この点でも(i)と同様試行錯誤法の方が弁証法に比べてより包括的、普遍的である。

ポパーは思想の歴史の弁証法的解釈が時には全く満足すべきものでありうること、試行錯誤による解釈に若干の価値ある細目を加えうることを認め、科学史から光の粒子説と波動説の例を引いて弁証法的発展の典型だと承認する。しかし、彼は弁証法論者の用いる幾つかの隠喩 metaphors に批判の目を向けるのである。まず弁証法でテーゼがアンチテーゼを生むと表現されていることを取り上げて次のようにポパーは述べる。「実際にアンチテーゼを生みだすのはわれわれの批判的態度 our critical attitude だけであり、そうした態度が欠けている場合——そうしたケースはまったくしばしばのことである——いかなるアンチテーゼも生みだされないだろう。」テーゼとアンチテーゼの抗争がジンテーゼを生み出すという表現も同様の欠陥をもった隠喩であり、無に終ることがしばしばある。そして、テーゼとアンチテーゼの抗争からジンテーゼに到達した場合でも、弁証法は後者が前の二者の長所を保存している preserve と表現するが、この表現も粗雑であると彼は批判する。なぜならジンテーゼはどんな場合にも古い観念の外に、発展の以前の段階に還元できない新しい観念をふくんでいるから、つまり「ジンテーゼは通常テーゼとアンチテーゼによってあてがわれた素材の構成よりも大なるものとなろう」からである。以上のようなポパーの論点について弁証法論者はどう答えるべきであろうか。

ポパーの批判点を、(1) アンチテーゼが生れるには批判的態度が必要である、(2) テーゼとアンチテーゼの抗争からつねにジンテーゼが生れるのではない、(3) ジンテーゼはテーゼとアンチテーゼとの長所を保存するだけではない、の三点に纏めよう。まず(2)について検討することにする。

たしかにポパーの批判する通り、思想その他の発展のコースは多様であり、形式的には三つのコースに分類され、弁証法的トリアードはその一つのコースにす

ぎず、歴史の個別的事象がつねにそのコースを進むものでないことは経験的にもよく知られていることであり、弁証法の古典家たちも否定してはいないことである。ヘーゲル自身、実証的なある種の学問について次のように述べている。「これらの（実証的な）学問は、そのはじまりにおいては合理的であるが、普遍的なものを経験的な個性性と現実性とへまで下降させねばならないために、偶然的なものへ移ってゆくのである。この変転と偶然との世界においては概念は通用せず……無決定の余地が残されている。……自然の理念にしても同じことであって、それは個別化するにいたると、偶然的なものへ消失してしまう。……歴史でさえ理念がその本質をなしてはいるが、理念のあらわれが偶然と恣意との領域にあるかぎり、この例にもれない。」⁽¹²⁾（傍点筆者）歴史について丁度同様のことを述べているエンゲルスの文章も掲げておこう。「歴史の領域における無数の個人意識と個人行動との衝突は意識のない自然を支配している状態と全く同じ状態をあらわすのである。……歴史的事件は同様に全体としてかつ大部分偶然によって支配されているようにみえる。しかし表面上偶然がその役割を果たしている場合にもそれはつねに内部に隠された法則によって支配されているのであって、問題はこの法則を発見することにあるのである。」⁽¹³⁾

これら二つの文章はいずれも歴史における偶然の支配を認めることによって、個別的な思想の発展のコースに多様性を禁じてはいないと解釈してよからう。したがってヘーゲル自身のさきに掲げた弁証法的トリアーデの特徴づけは、いわゆるア・プリオリな論理的理念ないし概念⁽¹⁴⁾が示す弁証法的発展のモデル・コースであって、経験的世界の事物や個々の恣意的な思想の発展つまりは試行錯誤のコースは偶然的な個性性の領域にあるものとして、つねにそのモデル・コースと合致するとはかぎらない。とはいっても、もちろん弁証法論者の歴史の発展観の根底には、あの有名な「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」⁽¹⁵⁾という命題が厳存しており、ヘーゲルにあっては「理性の狡智」、⁽¹⁶⁾弁証法的唯物論者にあっては「社会の運動の自然法則」⁽¹⁷⁾が歴史発展をそれぞれ窮極的に決定するモデル・コースとして想定されていることは否定できない。

ただボパーの批判点に戻って結論するならば、次のようにいいよう。偶然や

恣意の介入する歴史において、個々人ないし彼らの集団の営みである思想の発展のたどるコースはポパーの主張するように多様なものであろうが、なお弁証法論者は、その思想が理念ないし存在を正しく反映するかぎりで思想として存続しうるが、それが理念ないし存在を全面的に反映しうるものでないかぎり、その他面を反映する思想を呼びだし、結局さらにより総合的な思想を呼び出すという傾向ないし必然性が存在することを主張する、と。

次に(3)の論点についてであるが、この点については、ヘーゲルをはじめとして弁証法論者はすべてポパーと同意見であろう。たしかにドイツ語の *aufheben* という語は多義的で彼の嫌うところであるが彼自身この語を注で解説して、「保存している」の外に三つの語義を挙げており、その第四番目の語義として「より高い段階へ高める」(lift to a higher level) を解説するのを忘れてはいないのである。ここでも若干の弁証法論者の観念の発展に関する見解を引くことにしよう。ヘーゲルは認識における弁証法的運動を次のように語っている。「弁証法的運動は、意識にとって新しい真の対象がそこから生れでてくるかぎり、……本来は経験と呼ばれるものである。」⁽¹⁸⁾ (傍点筆者) またレーニンも弁証法のいわゆる新しい質的發展に関して、「すでに通過した諸段階をいわばくり返すが、しかし異った仕方、より高い基礎のうえにくり返す発展 (『否定の否定』)。直線にはなくいわばラセン状に進む 発展、飛躍、激変、革命による 発展。『連続性の中絶』。『量の質への転化』……」⁽¹⁹⁾ 等々と弁証法の原則的な説明を行っている。結論として、弁証法の原則的主張は、いわゆる形而上学的方法とは対蹠的に、新しい質的發展を説くところにあり、ポパーのこの点での批判はその誤解にのみ妥当するにすぎない。

最後に(1)のアンチテーゼを生むものはわれわれの批判的態度であるという論点を検討しよう。弁証法的唯物論者が、そしてヘーゲルは特に、ポパーの指摘する隠喩をしばしば行っていることは事実であるし、それには思惟と存在との同一視ないし反映論が源泉となっているといってよいであろう。つまり、思惟は存在と同一であるか、存在を反映しているのであるから、思惟ないし思想の弁証法的発展は存在の発展過程にたやすく還元されうるのである。その点でいわば認識論の

わくのなかでのみ思想の発展を問題とするポパーには、指摘される隠喩の不十分さが当然気がかりとなるのであろう。事実、古い弁証法的唯物論の教程は弁証法を説明するのに客観的存在の発展に目を向けるのが主であって、思惟の発展の方は殆どお留守の状態であった。弁証法がただ発展のトリアーデを抽象的に原則として振りまわすだけでなく、有効な研究方法として力をもち、思想を発展させるための指導原理となるのには、このポパーの批判は卒直に受け入れられねばならない。

以上のようなポパーの論点にきわめて近い主張として、次のようなデューイの文章はたいへん興味深くまた示唆的でもある。「テーゼ、アンチテーゼ、ジンテーゼの弁証法は最初の対立命題が窮極的でないことを認める。しかしそれはジンテーゼが対立命題から直接に生じることを仮定するという論理的誤謬を犯している。科学的探究ではテーゼ、アンチテーゼはジンテーゼを生むものとは考えられていない。科学的問題は高度に普遍的な名辞の示す主題を特殊な条件に分析することによって処理されるのであって、概念のあやつりによって処理されるのではない。」⁽²⁰⁾

弁証法により科学的な形態を与え、科学的な探究に際して、より有効な理論ないし思想を導きうるためにも、やはり新しい観念や思想が、どのように提出され、批判され、テストされるのか、その主体的な条件究明が今後弁証法論者にますます要求されるのではなかろうか。

(Ⅳ) 矛盾律の否定は科学の否定にいたる

すでにこの問題は、戦後のある時期わが国でも広く論議されたものであり、弁証法論者と分析哲学者との間で、あるいは弁証法論者の内部において激しく論争されたのは周知の通りである。そうした論争のなかには矛盾律の否定を批判するポパーとよく似た議論がなかったわけではないが、彼のこの点の批判は推理の規則や三段論法を使って論証を試みていることが特色である。

ポパーは弁証法論者の最大の欠陥は矛盾について語る際のルーズなやり方であると強調する。もちろん、思想の歴史においては矛盾が最も重要な役割を果たすことをポパーが否定しているわけではない。彼は、(1)理論の内部にある矛盾、(2)理

論と他の理論との間にある矛盾、(3)理論と事実ないし事実の言明との間の矛盾、これら三つの場合を挙げ、「矛盾がなければ、つまり批判がなければ、われわれの理論を変える合理的な動機はないし、知的な進歩はないであろう」と述べる。

しかし、矛盾のもつ有効さから、この矛盾を避ける必要がないと弁証法論者は誤って結論する、とポパーは批判するのである。弁証法論者は、伝統的論理学の矛盾律を否定して、新しい論理学 new logic、弁証法的論理学 dialectical logic をうち立てるよう要求するが、ポパーによれば弁証法は歴史学説 historical doctrine にすぎないのであって、同時に論理学理論 logical theory たろうとするのはすさまじい要求であってなんの根拠ももたないのである。

このポパーの批判の根底には論理学を演繹の理論 theory of deduction と限定する近代形式論理学者の前提があるのであって、この前提から弁証法は演繹にはなんの関係ももたず、したがって論理学ではないとの結論が簡単に生じる。ここで根本的に問題となるのは論理学の定義であり、定義の仕方によって弁証法が論理学であるかいないかは変わってくるので、そもそも弁証法は論理学であるかないかの議論そのものが無意味である。ポパーの議論は結局、弁証法は演繹の理論、近代形式論理学ではないという自明のことを主張しているにすぎないと思われる。そして真に必要なことは弁証法が論理学（つまり、近代形式論理学）であるかないかではなく、この論理学とどのような関係にあるかを考えることであろう。

さて、ポパーの矛盾についての批判は結局のところ、矛盾律が否定されて、「もし二つの矛盾する言明が認容されるならば、およそいかなる言明であろうと認容されねばならぬ、なぜなら矛盾する一対の言明からはいかなる言明も妥当的に validly 推理されうるからである」という趣旨を、(1)推理の規則によって、(2)三段論法によって、論証することであったが紙数もなくなったので推理の規則による論証だけを取り上げてみてみよう。第一の推理の規則を定式化して、「前提 p (例えば『ソクラテスは賢い』) から ' $p \vee q$ ' (例えば『ソクラテスは賢いかあるいはピーターは王であるかである』) の形式をもったいかなる結論も妥当的に演繹されうる」とポパーは述べる。

$$\frac{p}{p \vee q}$$

そして、第二の推理の規則を「二つの前提 non-p と $p \vee q$ から、われわれは結論 q をうる」と定式化する。

$$\frac{\text{non-p} \quad p \vee q}{q}$$

つまり、最初の前提 non-p がもし真であるならば、第二の前提の構成要素（選言肢） p は偽である。かくしてもし両前提が真であるならば、第二の前提の選言肢 q は真でなければならない。すなわち二つの前提が真である場合（つまり矛盾した言明 non-p と p とが共に真と主張される場合）はつねに q （任意の言明であってなんでも含むことができる）は真でなければならない。

この二つの推理の規則を使うことによって、結局われわれは、「矛盾する一対の前提からわれわれの好むとおりのいかなる結論をも推理しうる」ことになるのである。つまり、もしある理論が矛盾を含んでいるならば、その理論はすべてのことを、したがってなにもものも nothing 意味しない。それゆえ理論が矛盾を含む場合、まったく理論としては役に立たない、とポパーは批判するのである。彼は矛盾を受容することによって批判が息を止め、科学の崩潰が避けられぬことをおそれる。

弁証法から矛盾律を犯す種類の矛盾を除去しても、弁証法がもつ理論的有効さは減じないし、また科学的となるためにもそれは必要なことであるであろう。弁証法論者のなかにはいまだに弁証法的矛盾を形式論理的矛盾と同一視している人人が存在しており、またヘーゲル自身そうした論述を行っているが、弁証法も形式論理学の矛盾律を犯すものではありえない。弁証法論者はみずからが矛盾と呼んでいるものをそれぞれの特質にしたがって整理分類し、誤解の生じないような再命名をすることが必要であろう。ポパーが矛盾を衝突 conflict, 対立する傾向 opposing tendency, 対立する利害 opposing interest などと呼び直すことを提案しているが、こうした提案にならって、矛盾だけでなく、弁証法における誤解を生じやすい多義的な術語を総点検して、弁証法を殺さぬ新しい術語の作

製を試みてもよいではなかろうか。いずれにしても弁証法の多義的な言語使用は再検討を迫られているように思われる。

結 び

以上限られた紙数で、ポパーの弁証法批判の幾つかの論点を検討し、弁証法論者として反論すべきこと、また卒直に聞き入れねばならぬことを私なりにいくらかでも明らかにした心算である。次の機会にはポパーによる弁証法論者の歴史観の批判に立ち入って検討を試みたい。

参考文献

- (1) K. Popper, The Open Society And Its Enemies, Vol. 2, P. 309 の Note 36 を参照。
- (2) Hegel, Sämtliche Werke (Jubiläumsausgabe) B. 8, S. 83. 『小論理学』岩波文庫上116頁。
- (3) 例えばエンゲルスの『反デューリング論』第12章の弁証法の叙述や、レーニンの『哲学ノート』中のヘーゲルの『論理学』第二版の序文へのノート等参照。
- (4) Hegel, op. cit. S. 184～S. 198. 岩波文庫上239頁～255頁。
- (5) Hegel, Sämtliche Werke B. 2, S. 14. 『精神現象学』河出書房17頁。
- (6) Keynes, The General Theory Of Employment, Interest And Money, Chap. I The General Theory 参照。
- (7) Hegel, Sämtliche Werke B. 8, S. 279. 岩波文庫下32頁。
- (8) 毛沢東, 『実践論矛盾論』国民文庫53頁。
- (9) 同上書78頁。
- (10) スターリン, 『弁証法的唯物論と史的唯物論』の第二節参照。
- (11) Feuerbach, Sämtliche Werke B. 2, S. 159. 『ヘーゲル哲学の批判』岩波文庫10頁。
- (12) Hegel, op. cit. S. 62. 岩波文庫上87頁。
- (13) Marx Engels Werke B. 21 S. 297. 『フォイエルバッハ論』国民文庫61頁。
- (14) Hegel, Sämtliche Werke B. 4, S. 57 『大論理学』岩波書店上巻の一 45頁～46頁。B. 8, S. 87. 『小論理学』岩波文庫上121頁。
- (15) Hegel, Sämtliche Werke B. 7, S. 33. 『法哲学』（世界の名著ヘーゲル）中央公論社169頁。
- (16) Hegel, Sämtliche Werke B. 11, S. 63. 『歴史哲学』岩波書店上巻62頁。
- (17) Marx Engels Werke B. 23, S. 15. 『資本論』青木文庫(1)73頁。
- (18) Hegel, Sämtliche Werke B. 2, S. 78. 『精神現象学』河出書房64頁。

- (19) Lenin, Collected Works Vol. 21, P. 54. 『カール・マルクス』の弁証法の項参照。
(20) Dewey, Logic, P. 192.

筆者紹介：

大正15年10月9日生まれ。昭和26年、名古屋大学文学部哲学科卒業。現在、愛知教育大学助教授。

主要論文訳書：

「ヘーゲル論理学への道」(日本哲学会「哲学」)

「ヘーゲル弁証法と分析哲学」(早稲田大学出版部『現代哲学の基礎』)

ヒトラー『わが闘争』(共訳)